

「本物」の魔力——日本の寺院・神社観光と歴史言説の諸問題

中西 裕二

日本では、六世紀に朝鮮半島から伝来した仏教と、日本古来の民族宗教である神道という、二つの宗教が歴史的に併存してきたと言われている。現在、寺院は仏教の宗教施設であり、神社は神道の宗教施設であるが、これらの宗教施設は、国内外双方の観光客にとって観光の重要な目的地となっている。京都や奈良は、外国人観光客にとって魅力的な伝統的寺院群という観光資源があるがゆえに国際観光都市と呼ばれている。

宗教施設の利用者・訪問者は、本来、その宗教宗派に属する宗教者、またはその信者である。しかし近代観光は、これらの範疇に入らない人々が積極的に宗教施設を訪れる機会を創出した。それは、これらの宗教施設を「文化財」「文化遺

産」と範疇化し、宗教者・信者以外の人々にとっても重要な普遍的文化として位置づけ、それを巡検する文化観光という形態の創出である。一九七二年に国連のユネスコにおいて採択され、一九七五年に発効した「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」、いわゆる世界遺産条約により登場する「世界遺産」はその好例だろう。ユネスコにより世界遺産として登録される文化財には、人類にとっての「普遍的価値」があると認められなければならない。例えば京都や奈良のいくつかの古い神社は、世界遺産と認定されたことで、日本人の宗教、宗教観というコンテクストを離れ、通文化的に普遍的価値をもつ文化財と位置づけられた。これにより、信仰を持つ、持たない、あるいは民族の如何に関わらず積極的に宗教施設＝文化遺産を訪問する機会が正当化されたともいえる。この訪問形態がすなわち近代の文化観光であり、その意味で近代独自の現象といえるのである。

文化観光において、文化遺産を訪問する人々（多くは観光客と考えることができる）はそれが「本物」であり、それを通して現地の「本当の」歴史と文化に触れることを期待する。何が本物で、かつ本当の歴史・文化であり価値を持つのかという判断は、日本では従来、文化財保護法に基づき日本の文化行政（文部科学省と文化庁）が担っていた。しかし、それはあくまで国内⇨日本人向けのものであった。だが観光がグローバル化し、日本でもインバウンド観光への積極的な施策が講じられるようになると、ユネスコの世界遺産認定は「普遍的価値」という新たな価値を日本の文化遺産に与え、かつその価値を諸外国にまで広める重要な「お墨付き」となり、結果としてインバウンド観光振興にとって極めて重要なタイトルとなった。世界遺産には、真正性 (authenticity) と完全性 (integrity) という厳しい基準があり、この基準をクリアしている遺産は、まさに当地の歴史と文化を体現しているということになる²⁾。

したがって、この種の文化観光をおこなっている観光客は、「本物である」文化遺産を通して「本当の」歴史と文化に触れる、ということになる。これは間違いではない。日本の世界遺産の例を挙げてみよう。日本において、日本の宗教文化と関連する世界遺産は多い。法隆寺地域の仏教建造物（一九九三年登録）、古都京都の文化財（一九九四年登録）、厳島神

社（一九九六年登録）、古都奈良の文化財（一九九八年登録）、日光の社寺（一九九九年登録）、紀伊山地の霊場と参詣道（二〇〇四年登録）、平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—（二〇一一年登録）、の七箇所がそれに該当し、日本にある世界文化遺産（十二箇所）の半数以上を占める。これらの神社を訪問することは、日本の古代末⇨中世、あるいは近世初期の文化に直接触れることになる。なぜなら、これらの神社はその時代からそこにあり、そこにある神社建築は、新しいものでも三百年ほど、古いものでは千年という時間が創建からたっているからである。木造建築ゆえの補修・改修があったにせよ、日本の神社建築の改修は部材交換であるため、創建時と大きな変化はない³⁾。そこを訪問する観光客が、このような文化財に接し、日本の「本当の」歴史を実際に経験したと思うのは当然であろう。しかし、「本物」である文化財は、はたして「本当の」歴史の証拠なのだろうか？ この、当たり前の命題について再考するのが、本報告の目的である。

ここで、日本人観光客、外国人観光客双方にとって有名な観光地、鎌倉の鶴岡八幡宮を例としてこの問題を考えてみたい。ここでこの神社を事例として取り上げる大きな理由はない。しかし、二〇一二年一月、日本政府はユネスコに対し、

すでに暫定リストに入っている「富士山」と「鎌倉」を世界文化遺産に推薦し、ユネスコの諮問機関であるイコモス(ICOMOS)の委員による現地調査が二〇一二年九月に予定されていることから、この問題を考えるに適している点、そしてこの宮に関する史料面が豊富であり、かつ関東圏で生まれた、あるいは関東圏に居住している日本人にはわかりやすい事例だという点による。

中世の武士の頭領、源頼朝(一一四七〜一一九九年)が新たに創造した都市・鎌倉の中心に、武士による信仰の象徴的存在として鶴岡八幡宮は創建された。この神社のホームページ⁽⁴⁾によれば、一〇六三年にこの神社は作られ、一一九一年に現在の神社の原型が作られた。鎌倉は東京から日帰り観光が可能な距離であるため、日本人観光客のみならず、東京を訪れる外国人観光客のエクスカージョンとして最適な場であるといえる。正確な統計はないが、現在、一年間に五〇〇〜六〇万人の外国人観光客が鎌倉を訪れているらしい。すでに明治初期の英字新聞でも、エクスカージョンに適した場所として鎌倉が紹介されている。⁽⁵⁾この鎌倉観光の中心的存在が鶴岡八幡宮である。

この宮の現在の社殿は、一八二八年に再建されたが、国の重要文化財の指定を受けている。もちろん、この社殿の外観や建築技法は創建当時と異なると思われるが、この地で八百

年以上、神が祀られ、武家の信仰を集めていたことはまぎれもない事実である。この神社の境内に立ち、遠い中世に思いを馳せることはできなくもない。

しかしながら、鶴岡八幡宮は明治維新(一八六八年)直後、神社内の風景が一変している。一七三三年に描かれた絵図⁽⁶⁾から、神社内に現存しない多くの堂塔があったことがわかる。本宮へ続く階段前には、薬師堂、多宝塔、若宮社、鐘楼、祈禱所、護摩堂、経蔵といった堂々とした伽藍があり、また上宮楼門の左右には愛染堂、六角堂もあった。その中で現在残されているのは若宮社のみである。階段前の広場の中心にある建物は、かつては祈禱所であったが、現在は舞殿(神道の舞いを舞う場)となり、その役割は大きく変化している。

この風景の変化は、外国人により写真に撮影されている。報道写真家として来日したイタリア人、フェリックス・ベアト(Felix Beato)は、現存していない多宝塔、経蔵(仏教教典の収蔵庫)、薬師堂を撮影している。⁽⁷⁾また、一八七〇〜七五年に出版された、来日外国人に対して日本を紹介した英字新聞『The Far East』にも、現在とは異なる神社内の風景の写真、そしてその後の神社内の写真が掲載されている(写真1、写真2、写真3⁽⁸⁾)。いくつかの堂塔が取り払われた、広々とした神社内の風景(写真3)が、現在の神社のそれに最も近い。

この風景の激変は、鶴岡八幡宮のみで起きたわけではない。明治維新（一八六八年）直後の日本では、ほぼすべての神社が同様な変化を経験した。日本史において、これは神仏分離と呼ばれる。近世末（十八世紀後半〜十九世紀中頃）、近代日本のナショナルリズムの母体となる国学思想において、純粹に日本的なるものは何か、探求が進められた。当時の国学思想家は、日本人の文化的基盤となる宗教文化において、日本の神話的世界、とくに七一二年に編纂された古事記の内容こ



写真1



写真2

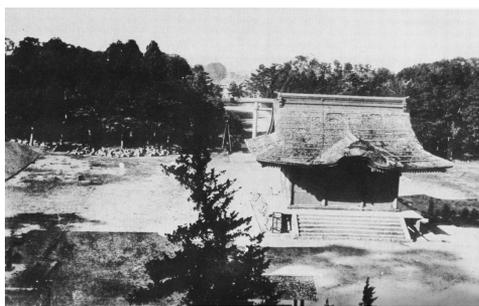


写真3

そが純粹に日本的な文化的本質であり、それが外来の仏教により変質したと考えた。彼らが、その具体的な変質の契機と考えたのが、平安時代（十世紀頃）から起きる神仏習合という思想であった。

この思想は、通常、神道（日本古来の民族宗教）と仏教が混淆した宗教形態と理解されるが、これは誤解を招く表現である。近年、日本宗教史の通史を記した末木文美士は、奈良〜平安期の神仏関係を、①神は迷える存在であり、仏の救済

を必要とする考え方、②神が仏教を守護するという考え方、③仏教の影響下に新しい神が考えられるようになる場合、④神は実は仏が衆生救済のために姿を変えて現れたものだという考え方、の四つに整理し、①と②は奈良時代から始まり、③と④は平安時代に発展したと整理した。一般的に神仏習合という場合、多くの日本人は④の形態、すなわち日本の神々はインドの仏が日本の民衆の救済のために、日本の神に姿を変え日本に現れたという本地垂迹説がまず頭に浮かぶだろう。だが、神仏習合という考え方のポイントは、日本の神々を仏教の枠に包摂する仏教思想であったという点にある。したがって、仏はつねに神より上位に位置づけられ、宗教者の地位もこの関係に対応し、僧侶は神職より宗教的に上位に位置づけられていた。

また、神仏習合に基づく神社の運営、神社での儀礼の執行においても、明治維新前までは、中心になるのは僧侶たちであった。とくに、前述した鶴岡八幡宮のような大規模な「宮」の場合、伊勢神宮を除き、神を祭祀する寺院という性格が強かった。⁽¹⁰⁾ 鶴岡八幡宮の正式名称も、鶴岡八幡宮寺という寺名であり、青山学院大学名誉教授で、後に鎌倉国宝館館長なども務めた貫達人は、著書『鶴岡八幡宮寺——鎌倉の廃寺』の「はじめに」において「鶴岡八幡宮は、明治元年（一八六八）三月、神仏混淆が禁止されるまでは、正式の名称を「鶴岡八

幡宮寺」といい、寺であった。（中略）八幡宮寺は鎌倉の廃寺のうちで、その創建から廃絶までの事情が詳細にわかっている、最も華麗な経歴をもつ廃寺であるということができる」と述べている。⁽¹¹⁾ その組織は、『神仏分離史料』によると以下のように記されており、僧坊が宮を管理運営し、その下部組織として在家（非僧侶）方が位置づけられていたことがわかる。

鶴岡八幡宮が真言僧侶の支配の下にあったことは、前にも述べた通りであるが、社務別當は早く永正（一五〇四〜一五二〇年）の頃その姿を没し、供僧これに代って一山を統べたと傳へられて居る。供僧はもと（中略）の二十五坊、應永（一三九四〜一四二七年）の頃より坊を院に改めたが、漸次衰微に赴き、天正（一五七三〜一五九二年）の末に至りては、（中略）の七院を存するのみとなり、文禄二年（一五九三年）徳川家康の助力によって、（中略）の五院を再興し、爾来、明治維新に至るまで、この十二院が合議の制の下に、臈次によって、一臈を上首とし、一山を統轄して来たといふことである。

かくて供僧の下に、神主大伴氏、小別當大庭氏、社僧花光院・松源寺、社人（中略）の八氏、承仕山口、藤田の二氏、恰人（中略）の八人、神楽師（中略）の八人、

八乙女（中略）の八人が、何れもその職に奉仕して居たのである。（西暦は筆者による加筆）

また、先の写真が掲載されていた『The Far East』紙上でも、鶴岡八幡宮は“Temple of Hachiman”と訳されており、幕末まで鶴岡八幡宮が一般的に「寺院」と考えられていたことは間違いない。

このような簡単な説明だけでも、日本古来の民族宗教と言われる神道は、歴史的にいつ頃から宗教的主体性を持ち得たのかという疑問が出てくる。ここ三十年ほどの間、研究が飛躍的に発展した日本の歴史学、思想史、宗教学においては、①古代においては、神道と呼ぶべき宗教体系はまだ成立しておらず、単なる神祇祭祀（神を信仰し簡単な儀礼を行なう）のみが存在していた、②日本の神々は、中世の神仏習合思想の中で仏教の外縁に位置づけられ、古代と中世には神観念および神祭祀に大きな断絶が生じ、中世以降神々への祭祀が仏教の枠内において徐々に神道として体系化された、という考えが一般的になりつつある。さらに、神仏習合は僧侶により展開された仏教思想である、という歴史を踏まえ、黒田俊雄のように、歴史的には神道を仏教の一宗派に位置づけるのが適当だと主張する歴史学者さえいる。

日本の文化史を総体として見ると、現在の日本文化の要素

の多くが中世に由来する点は否定されていない。したがって、仏教が主導し中世に発展した神仏習合は、日本の文化を變質させた一方で、「神仏習合こそ、日本の宗教のもっとも（古層）に属する形態と言いうことができる」という考えが必然的に導かれることになる。つまり、現在を生きる我々の宗教観、世界観の根底にあるのは、中世に発展したこの観念の残存ということになる。

結局のところ、このような「日本的な」宗教文化のあり方を否定したのが近世末の国学者（ナシヨナリスト）たちであり、彼らはこの否定により新たな nation 像を目指したのである。その政治的な実践が、明治維新直後の一八六八年に出された神仏分離令（神仏判然令）という法令であった。神と仏を明確に分けることを命じたこの法令に従い、神社にあった仏教施設は破壊、あるいは移築され、仏像、法具、經典類も打ち捨てられるか、売却されてしまった。『The Far East』に掲載された塔の写真（写真2）は、塔の最上部がすでに欠落していることから、解体途中の写真であることがわかる。そのような建造物は、日本全国でおそらく数千から数万にのぼるだろう。また多くの神社では、仏像・鏡像などを神の象徴として神社に置き、祭祀対象とすることが普通であったが、それらの多くも売却、あるいは破壊された。その数はおそらく数万以上と考えられる。¹⁵⁾この行為は、その規模

や内容から、中国で一九六〇年代に起きた文化大革命、また近年、アフガニスタンのタリバンが起こしたバーミヤン石仏の破壊に匹敵する、あるいはそれ以上の文化破壊だったといえるだろう。神社を管理、運営していた寺院は撤去され、神社を管理していた僧侶は還俗するか、神道の宗教者へ転向していった。

この明治初期の神仏分離および仏教寺院の被害は、日本宗教史上、最大の事件だといわれる。日本の宗教民俗文化が、この事件により根本的な変化を余儀なくされたのは、想像に難くない。

鶴岡八幡宮の風景が大きく変化した理由が、明治維新初期の神仏分離政策による点がおわかりいただけだと思う。神社から仏教的施設をすべて取り払うことで、日本のナシヨナリズムにおいて想像されたいにしえの世界が、具体的に日本人の眼前に現れたのである。だが、そのときに出現した神社の姿は、実は、人々がじかに接することができた「近代」そのものなのである。なぜならば、明治初期の神仏分離以前において、「宮」「社」はこのような偉容を示してはいなかった。神を祭祀する「宮」の大規模化は、すべて仏教の枠内で行なわれていたからである。鶴岡八幡宮の例でいえば、現在の宮の景観は近代以前には存在していない。

明治初期の神仏分離の作業、およびそれに伴う仏教排除運動は、もちろん日本の歴史教科書に記載されおり、多くの日本人が知りうる事柄である。しかし多くの日本人は、それが日本人の宗教的世界を根本から覆した大事件とは考えてはいない。その理由はいくつか考えられるが、それを一つ一つ指摘し、検討するのが本稿の目的ではないので、観光と関係する点を一つだけ指摘してみたい。

神仏分離によって成立した神道の世界は、まさしく創られた伝統 (the invention of tradition)¹⁶⁾ であった。明治初期の神仏分離以降も、神々の世界、そして神々を祀る施設は、若干の改変があったにせよ、元の姿のまま残された。この事実は、神仏習合とは「神道＋仏教」であり、その中心として祭祀されるのが神である、したがって仏教はこの祭祀において中心ではなく、取り除くことは可能だということ、すなわち「(神道＋仏教)―仏教＝神道」という式を可視化させたといえるだろう。神仏分離により、仏教の影響を受けていない神道の姿が創造されるが、それは歴史上存在したことの無い形態ともいえるのである。

歴史遺産は訪問者の想像力をたくましくする。仏教関係の施設が取り除かれたとしても、残されている神祭祀関連の施設が、文化遺産の定義に従い「本物」であれば、訪問者はその「本物」を抛り所に想像力を働かせるだろう。訪問者は

「本物」に魅了されるために観光地を訪れるからである。しかしながら、日本で観光地となっている神社の多く——八幡社はもちろんのこと、熊野社、祇園社、諏訪社、天満宮など——は、神仏習合という、日本的仏教ともいえる枠組みにおいて成立し、江戸時代の後期までその枠組みのもとで存続していた。これは厳然たる歴史的事実なのである。

その意味でいえば、現存する鶴岡八幡宮は「偽物」である。しかし、そこで神が八百年以上祭祀され続けたことは「歴史的事実」であり、残されている文化遺産としての建造物は「本物」なのであるから、現在の鶴岡八幡宮は長い伝統をもつ「本物」の歴史遺産ということも可能である。現在の日本において、ほぼすべての人々の認識は後者だろう。なぜなら、近代における歴史遺産の真正性は、結局のところ、現存する「もの」と、その「年号」に規定されるからである。近代的な意味で、その歴史遺産が「本物」であれば、隠喩的であれ、人々はその歴史遺産をめぐる歴史に真正性を認めるだろう。「本物」は、そのようにして強い力で我々の想像力を規定する。現在多くの参詣者を集める神社は、かつてそのほとんどが寺院組織の一部であったため、構成する仏教関連施設がないの大規模神社、宮は、歴史上現在のような形で存在していなかったという事実も、残された「本物」のもつ力により霧散してしまっている。「本物」は、それを本物と見なす近代

的手法により、不在の「本物」への想像力を働かせない機能を担っているともいえる。

したがって日本の神社における「伝統文化の観光」とは、近代国家が創造したイデオロギーを、観光という場で確認し消費する行動ともいえる。しかし、その場に観光客が多く訪れ、その人々が「本物」の文化遺産に触れることで、括弧付きの「伝統」は、括弧の取れた歴史言説 (historical discourse) へと変換され、新たなリアリティを獲得する。その意味で近代のマスツーリズムの成立は、おそらく近代の国家イデオロギーの普及において、かなり重要な役割を担っていたと考えられる。

付記

本稿は、二〇〇九年十一月十四日〜十五日、獨協大学で行なわれた国際シンポジウム「独協国際フォーラム「ツーリズムの先へ」(Beyond Tourism: Performing Memory, Placeand Identity)」において報告した内容の日本語版である。本シンポジウムでは、観光社会学者として著名な Dean MacCannell 氏 (カリフォルニア州立大学ディヴィス校) / 民俗学・パフォーマンス研究の Barbara Krshenblatt-Gindlett 氏 (ニューヨーク大学) が基調講演を行ない、筆者を含め七名が研究報告を行なった。本シンポジウムで

の言語は英語で、その内容はすでに獨協大学外国学部交流文化学科紀要に収録されている^①。しかし、英語論文は日本語草稿をかなり短くまとめたものであることから、日本語草稿を若干手直した上で、日本語で公表すべきと考え、本誌に掲載させていただいた次第である。その機会を与えて下さった神田外語大学日本研究所に謝意を申し上げたい。

註

(1) とくに近年は、小泉純一郎内閣以降、矢継ぎ早にインバウンド観光振興の施策が出された。観光立国懇談会の開催(二〇〇三年一月)、その直後の第一五六回国会の施政方針演説における外国人旅行者の二〇一〇年までの倍増目標の設定、インバウンド観光振興を目的としたビジット・ジャパン・キャンペーンの開始(二〇〇三年四月)、観光立国担当大臣の任命(二〇〇三年九月)、観光立国推進基本法の可決(二〇〇三年十二月)と施行(二〇〇七年一月)、観光立国推進基本計画の閣議決定(二〇〇七年六月)、そして二〇〇八年十月に国土交通省に観光庁が設置される、等である。観光庁ホームページ <http://www.mlit.go.jp/kankocho/about/index.html> を参照のこと。

(2) authenticity の訳語には「真正性」「真実性」の二種類があるが、本稿では「真正性」と表記する。また、真正性と完全性の定義は「世界遺産条約履行のための作業指針」に記されている(英語による原文および文化庁の訳は文化庁ホームページ http://www.bunka.go.jp/bunkashingikai/sekaijibunkaisan/singi_kekka/sanko.html を参照)。ここでそれを詳述する余裕はないが、当該文化遺産が「本物」であること、遺産の文化的・歴史的文脈が備えられている程度、等を示す指針がこの二つの概念に集約されている。これらにより、世界遺産が「本物」である点が担保されることになる。

(3) 日本の寺社建築のすべてが木造建築であり、つねに改修・補修を必要とした点は、それらが「本物」であるかという真正性の定義に抵触していた。しかし、この改修・補修により文化遺産の真正性が損なわれたと解釈すると、一千年前の木造建築は存在しないことになる。この真正性の範囲については、一九九四年に奈良で開催された「世界遺産のオーセンティシティに関する国際会議」で採択された「奈良ドキュメント」において修正がなされ、改修・補修を必要とする木造建築にも真正性の概念が適用されるに至った。経緯については、「特別対談 世界遺産とともに歩んで——在任10年の成果と今後の課題」(ユネ

スコ事務局長松浦晃一郎と東京大学教授西村幸夫の対談『ユネスコ世界遺産年報 2010』日本ユネスコ協会連盟編、二〇一〇年、一四二―一四四頁）、および「オーセンティシティに関する奈良ドキュメント」（文化庁仮訳、http://www.bunka.go.jp/kokusai/bunka/bunkazahogo/pdf/nara_nara_j_02.pdf）参照。

(4) <http://www.hachimangu.or.jp/>

(5) *The Far East: an Illustrated Fortnightly Newspaper*. Vol.II, No.VII, pp.77-82. Yokohama: Printed and published for the proprietors by Wm. A. Miller, at the Japan Gazette printing office, 1871.

(6) 渋江二郎編『鎌倉の古絵図(1)——鎌倉国宝館図録第十五集』(鎌倉市教育委員会・鎌倉国宝館、一九六八年) 参照。

(7) 横浜開港資料館編『F・ニアド幕末日本写真集』(横浜開港資料館、一九八七年)、四六―五二頁。

(8) *The Far East: an Illustrated Fortnightly Newspaper*. Vol.I, No.II, p.4, 1870, Vol.I, No.VI, p.4, 1870, Vol.II, No.VII, p.81, 1871.

(9) 末木文美士『日本宗教史』(岩波新書、二〇〇六年)、三九―四〇頁。

(10) しかし近年の歴史学、思想史研究では、中世におけ

る伊勢神宮の仏教隔離自体が仏教的な解釈による点、神道的世界観の成立に天台本覚思想など密教系の知識が背景にある点、等が指摘されており、伊勢神宮の存在が古代からの神道の連続性を示す証拠となり得ない点が多く指摘されている。これらの議論については、黒田俊雄『黒田俊雄著作集 第三卷 顕密仏教と寺社勢力』(法藏館、一九九五年)、黒田俊雄『王法と仏法——中世史の構図』(増補新版、法藏館、二〇〇一年)、山本ひろ子『中世神話』(岩波新書、一九九八年)、佐藤弘夫『アマテラスの変貌——中世神仏交渉史の視座』(法藏館、二〇〇〇年)、佐藤弘夫『偽書の精神史——神仏・異界と交感する中世』(講談社、二〇〇二年)、佐藤弘夫『神国日本』(ちくま新書、二〇〇六年)など、多くの研究がある。

(11) 貫達人『鶴岡八幡宮寺——鎌倉の廃寺』(有隣新書、一九九六年)、四頁。

(12) 辻善之助・村上专精・鷲尾順敬編『新編 明治維新神仏分離史料 第三卷』(名著出版、一九八三年)、四八八―四八九頁。

(13) *The Far East: an Illustrated Fortnightly Newspaper*. Vol.II, No.VII, p.78, 1871.

(14) 末木文美士『日本宗教史』(岩波新書、二〇〇六年)、四〇頁。

(15) このような寺堂や仏像の正確な統計はない。しかし江戸時代、国学思想の影響を強く受けた藩は、明治政府に先行して神仏分離、寺堂の廃棄を行なった。現在の茨城県の大部分にあたる水戸藩では、一六六六年に一〇九八の寺院が、一八四五〜四六年に一九〇の寺院が廃され、村にあった小規模の堂、石仏類も破壊された。また、現在の山口県北部にあった長州藩の記録によれば、一八三三年に廃された寺社などの数は九六六六、破壊され捨てられた石仏、金属製の仏像は一二五一〇にものぼる。安丸良夫『神々の明治維新——神仏分離と廃仏毀釈』（岩波新書、一九七九年）、三八〜四〇頁、参照。

(16) E・ホフズボウム、T・レンジャー編（前川啓治、梶原景昭他訳）『創られた伝統』（紀伊國屋書店、一九九二年）参照。また、日本の江戸末から明治初期の神仏分離、仏教弾圧については、ジェームズ・E・ケテラー（岡田正彦訳）『邪教／殉教の明治——廃仏毀釈と近代仏教』（ベリカン社、二〇〇六年）参照。

(17) Nakanishi, Yujii, 'Magical Power of "Real Articles": Issues in the Historical Discourse about Old Temples and Shrines Tourism in Japan', in *Encounters*, vol.1, pp.21-25, 2010.